

桶狭間の合戦、大高城からの脱出 ～大高城で孤立した元康(家康)、さあ、どうする～

1 大高城の描かれ方

(1) 最新技術で再現を試みる



実際に画面に登場する「大高城」。遠くに見えるのは「丸根砦」、近くは城下の民家。手前はセットで背景はCG画像。



撮影スタジオの内部。当時の「城」の再現は大変良くてきていた。



本丸への虎口の様子。中世城郭の多くは天然の地形を利用した城郭造りが行われていたと考えられる。大高城の丘は岩盤室の部分があったのか。



本丸内部の様子。板の間であり、中央に炉が切つてある。兵糧入れの後ということで、米俵が積んである。

- (2) 大高城の地理的(地政学的)な重要性
- ・海辺に面している…当時の地形から鳴海と同様、今川氏にとっては海上を利用した物資の搬入や、作戦の展開も考えられる
 - 三河から尾張を抜けるのではなく、海上から伊勢に抜ける拠点として(小和田説)
 - ・南北朝時代から城としての存在価値を有していたと考えられる…伊勢湾の重要性と水軍



養老元年尾張国絵図
(猿投神社蔵)

2 大高城兵糧入れと桶狭間の合戦

(1) 「大高城兵糧入れ」が二度(三度)あった?!—歴史書の誤謬

・『三河物語』—永禄元年(1558)、義元の命で大高城に兵糧入れを敢行。永禄3年(1560)の桶狭間合戦の際にも大高城に兵糧を運び込んでいる。

此頃織田信長は父信秀の箕裘をつぎ。兵を強くし國をとますの謀をめぐらし。美濃伊勢を切なびけ駿遠三を押領せむと。鳴海近邊所々に砦をまうけ兵をこめ置と聞。今川義元大に怒り。さらば吾より先をかけて尾州をせめとり直に中國へ旗を立んと。是も國境所々に新寨を設け兵をこめし中にも。まづ大高城へは一族鵜殿長助長持を籠置しが。此城敵地にせまり軍糧を運ぶたよりを得ず。家のおなどもをあつめ評議しけれども。この事なし得んとうけがふ者一人もなし。しかるに君はわづかに十八歳にましましけるが。かひがひしくうけがひたまひ。敵軍の中ををしわけ難なく小荷駄を城内へはこび入しめられければ。敵も味方もこれを見て。天晴の兵糧入かなと感歎せずといふものなし。これぞ御少年御雄略のはじめにて。今の世まで大高兵糧

(2) 桶狭間の合戦—捉え方の根本

桶狭間合戦の真相と家康公の動き

『信長公記』 『改正三河後風土記』

もともと今川義元の上洛戦ではない



幾度も繰り返されてきた抗争の決着

- ・天文11年(1542) 第一次小豆坂合戦
- ・天文17年(1548) 第二次小豆坂合戦
- ・天文23年(1554) 村木砦(東浦町)合戦
- ・永禄3年(1560) 桶狭間の合戦

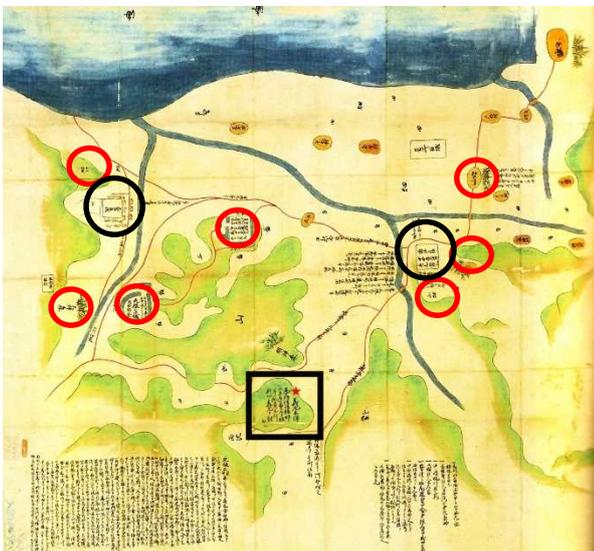
圧倒的な力の今川軍と、
尾張の新興勢力織田軍との戦い



織田信長像

ジョバンニ・ニコラオ画 天童市三宝寺蔵

誤った合戦の前提条件



桶狭間合戦図(蓬左文庫)



(3) 元康「大高城兵糧入れ」と義元の休息「おけはざま山」



金陀美具足（レプリカ／家康館）

御敵今川義元は、四万五千引率し、**おけはざま山**に、人馬の休息これあり。
 一 今度家康は朱武者にて先懸をさせられて大高へ兵糧兵糧入れ 鷲津・丸根にて手を碎き、御辛 労なされたるに依つて、人馬の 休息、大高に居陣なり。
 一 信長御覧じて、中島へ御移り 候はんと候つるを、脇は深田の 足入り、一騎打の道なり。無勢 の様体、敵方よりさだかに相見 え候。勿体なきの由、家老の 衆、御馬の轡の引手に取り付き 侯て、声々に申され候へども、 ぶり切つて…

- ・家康は「朱武者」と記される。「大高城兵糧入れ具足」と呼ばれている「金陀美具足」は飾り具足ではなかったか。※「徳川実記」には記されない
- ・鷲津砦を攻めたのは「朝比奈泰朝」。朝比奈泰能は三年前に他界している。
- ・信長は「深田の足入れ」悪条件をかえって有利と考えたのでは。

(4) 襲い掛かる信長—義元の最期

夜明がたに、佐久間大学・織田玄蕃かたよりはや鷲津山・丸根山へ人数取りかけ候由追々御注進これあり。
 此の時、信長、敦盛の舞を遊ばし 候。人間五十年、下天の内をくら ぶれば、夢幻の如くなり。一度生 を得て、滅せぬ者のあるべきかと て、螺ふけ、具足よこせと、仰せ られ、御物具めされ、たちながら 御食を参り、御甲をめし候て、御 出陣なさる。其の時の御伴には御 小姓衆、岩室長門守、長谷川橋 介、佐脇藤八、山口飛驒守、賀藤 弥三郎、是等主従六騎、あつたま で、三里一時にかけさせられ、辰 の剋に源大夫殿宮のまへより東を 御覧じ候へば鷲津・丸根落去と覚 しくて煙上り候、此の時馬上六 騎、雑兵式百計りなり。浜手より 御出で候へば、程近く候へども、 塩満ちさし入り、御馬の通ひ是れ なく、熱田よりかみ道を、もみに もんで懸げさせられ、先、たんげ の御取出へ御出で候て、

- ・信長が出陣を決意したのは鷲津・丸根砦が攻撃を受けていると聞いた時 義元の主力は大高方面に向かうと確信した時か。
- ・善照寺砦に織田の主力が集結していると見せかけた（数多くの旗差物）
- ・「おけはざま」に誘い込んだのでは（藤本説）

信長御覧じて、中島へ御移り 候はんと候つるを、脇は深田 の足入り、一騎打の道なり。 無勢の様体、敵方よりさだか に相見え候。一（中略）今度 は無理にすぎり付き、止め申 され候へども、爰にての御説 は、各よく貼承り候へ。あの 武者、宵に兵糧つかひて、夜 もすがら来なり、大高へ兵糧 を入れ、鷲津・丸根にて手を 碎き辛勞してつかれたる武者 なりこなたは新手なり。其の 上、小軍なりとも大敵を怖 るゝなかれ。運は天にあり。



濃姫、信長、注進、森蘭丸…現在は撤去された清洲城展示。間違いがありますね。

- ・「石水」…当時は雹が良く降った
- ・「敵の輔」…敵の頬骨、頬
- ・山際とは桶狭間山のことか。丘のような場所というのは当たらない。標高が最も高く、織田方の動きが良く見える場所
- ・後ろへ崩れる…現在の豊明の古戦場辺りの事か
- ・戦後、前後駅付近で大量の武具などが見つかったという記録がある
- ・義元は塗輿を捨て、現在の田楽坪に逃げ下る。

山際まで御人数寄せられ候ところ、俄に急雨、石氷を投げ打つ様に、敵の輔に打ち付くる。身方は後の方に降りかゝる。沓掛の到下の松の本に二かい三がみの楠の木雨に東へ降り倒るゝ余の事に、熱田大明神の神軍がと申し候なり。空晴るゝを御覧上げて、すは、かゝれ貼と仰せられ、黒煙立て懸かるを見て、水をまくるが如く、後ろへくはつと崩れなり。弓、鎗、鉄炮、のぼり、さし物等を乱すに異ならず、今川義元の塗輿も捨て、くづれ逃れけり。

爰にて御馬廻、御小姓歴々衆手負ひ死人員知れず、服部小平太、義元にかゝりあひ、膝の口きられ、倒れ伏す。毛利新介、義元を伐ち臥せ、頸をとる。是れ偏に、先年清洲の城に於いて武衛様を悉く攻め殺し候の時、御舎弟を一人生捕り助け申され候、其の冥加忽ち来なりて、義元の頸をとり給ふと、人々風聞なり。運の尽きたる験にや、**おけはざまと云ふ所は、はざまくみて、深田足入れ、高みひきみ茂り、節所と云ふ事、限りなし。深田へ逃げ入る者は、…**



3 大高城からの退却

味方の一信を待つべし
君をば鶴殿にかへて大高城を守らせしに。義元はか
らずも桶狭間に於て織田信長が爲に討れし時。君に
はその沙汰聞し召つれど虚實いまださたかならず。
かゝる所に御母方の御おぢなりし水野下野守信元
り。浅井六之助道忠してそのよし告奉りしは。義元
既に討れぬ。今川が持の城々皆明退たり。君にもは
やく其城を捨て御本國へかへらせ給へと申す。御家
人等も同じ様に勧め奉る。君聞しめし。野州外家の
**親ありといへども。當時織田方に属する上はその言
信じ難し。**もしそのいふ所の實ならざらんには。故
なくして當城を明退き人に後指さゝれんは。武門の
耻辱是にすぎず。道忠をば捕へ置て味方の一信を待
べしと仰ありて。今までは**二丸におはせしを俄に本
丸に移らせ給ひ。ひとへに守禦の備をなし給ふ。し
ばしゝて岡崎の城守りたる鳥居忠吉が方より。事の**

さあ、どうする家康！

